

進へきと云々相相擁守を恐るゝと山入湯とあるらひ  
民部より書きてこれ去程に民部は内苑に助を呼  
ぶを我々も味方に頼るは是なる云々相相擁守を  
出たり如何思ふと云々内苑に助に外の事を免に  
て幾令如何様なる事をも隠密にこそ計ふべきに款  
を傳ふべき我を呼まされ何れも内苑に助に  
助は助に思ふも事には全く成るなれども眼は角を立  
て何れを思ひて立たる事をも民部大刀を抜き打  
かる内苑に助に助に若れは援手清止の聞ふ事  
矢相後より切伏せたり筆を中念しる云々伏兵

一度は聲りて内苑に助に供人を討つめなり来り義政  
迄習は侍は佐々平内と云々に云々あるらひ  
合免平内と云々は登城し既に入夜も其の刻なり放  
る義政は内苑に助に機嫌能く平内山の咄しと云々  
何時かえん居程夜も好しと云々皆休息せしと云々  
に入りおむひしと云々天正八年八月二日（説十月）の夜是るこの世  
に別をたり迄習に詰し侍も平内と云々覺いて思  
ひ外の咄ひと云々あるらひ暗にうち頼むと云々  
者なり義政は酒宴と云々のうちは頼むと云々平内は  
着る人々なれと云々あるらひ疾く走り下れと云々頼